第八回　丸山眞男記念比較思想研究センター公開研究会

『別集』第四巻（正統と異端　一）「解説」の補足と訂正

中田喜万

はじめに

今回の公開研究会では、今日の日本で主導的な活躍をなさっておられるお二人の宗教学者に、『丸山眞男集　別集』第四巻（岩波書店、二〇一八年。以下、「本書」という）の書評をしていただくことができた。編集にあずかった者の一人として心より謝意を表したい。表現が適切かどうかわからないが、丸山眞男本人も、もしも存命であれば洞察に満ちた批判を歓び、そして無限に反論とおしゃべりを楽しんだことだろう。この会を催すことができただけでも、本書を公刊する意義があったと信じたい。

というのも、公刊にあたって気がかりだった点の一つが、この研究が未完成のままの記録にとどまっていて、完璧を期した丸山本人の遺志にそったものとは必ずしもいえないことであった（編者による公刊の理由は、本書、四四一頁）。未完成でも、このような研究会の形で後々活かされるのであれば、本書にはそれなりの学術的意義があるし、丸山本人も学問の発展のため、それを諒としてくれるはずであろう。

ただ、未完成の記録に最小限の加工を施しただけで『別集』に収載されたので、その読み方には若干の注意が必要であると思われる。ここでは簡略に、本書「解説」でふれられなかったことを補足し、また修正を加えて、責めを塞ぎたい。

一　「正統と異端」研究会の記録をたどるために

「正統と異端」研究会の記録が本書『別集』第四巻および刊行予定の第五巻に収載されることになっている。しかし紙幅の都合で、厖大な原資料の多くはこれに収めることができない。そこで本書のテキストに関連する未発表資料の翻刻が、この雑誌――東京女子大学『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』の第一一号（二〇一六年）、第一二号（二〇一七年）に先に掲載されている（紙媒体およびウェブ公開）。

加えて、研究会で語られる元となったメモ類が、東京女子大学丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブのウェブサイト[1]で検索できる。たとえば「正統と異端」のキーワードで検索すると、現時点で一一四件が検出され、その多くがウェブ上の画像として閲覧可能である。そのうち、研究会のために準備された資料、および研究会のあとのテープ起こし等の一覧が、本書四六〇頁以降に掲げられている。今後、丸山の「正統と異端」研究をたどろうとするならば、これらの資料の山に分け入っていくことになる。本書と次の第五巻が、その道しるべになれたら、と願っている。

二　研究の起点について

本書所載の研究会の記録は、一九八〇年代の録音記録に基づく。この研究がどのような目的で始められたかは、既に追憶の中にあって（例えば第Ⅲ章）、わかりにくい。まずは訂正から。

訂正　本書「解説」四三八頁、後ろから七行目

（誤）一九六〇年秋に　→　（正）一九六〇年に

堀米庸三『正統と異端』のきっかけになった研究会は、「秋」ではなく、実は一九六〇年代前半の安保闘争のさ中に催されたものであった（〔別表〕を参照）。政治の季節に、丸山は議会制民主主義の機能不全を憂いながら、研究活動としては、それと全くかけ離れた中世ヨーロッパの宗教史を学んでいたのである。

そのことは、「正統と異端」研究が、その時点で既に相当進展していたことを想起させる。事実、筑摩書房の『近代日本思想史講座』が企画され、研究会（資料番号155-2）が始められたのは、一九五六年頃のことであるという[2]。それは折しも、丸山自身の思想史の枠組が大きく変容し始めた時期と重なる。この変容の過程を、『講義録』別冊一・二によって毎年度の講義への反映としてある程度跡づけることができるようになった。昨年度のこの研究会でとりあげられた[3]。

ここでは、「正統と異端」の研究対象のとらえどころのなさが、研究当初から織りこみ済みであったことを強調しておきたい。森本報告でも言及されたように、一九五八年の丸山の次のような「フニャフニャ」発言がある。

つまり大げさだけど、ぼくの精神史は、方法的にはマルクス主義との格闘の歴史だし、対象的には天皇制の精神構造との格闘の歴史だったわけで、それが学問をやって行く内面的なエネルギーになっていたように思うんです。ところが、現在実感としてこの二つが何か風化しちゃって、以前ほど手ごたえがなくなったんだ。もちろん相手にとって不足だといったごうまんな意味でいうのじゃなくて、少くとも両方とも昔ほど堅固な実体性をもってぼくに迫ってこなくなった。そうなってみると、何ていうか、必死になって対決していた当の相手が――対決っていうのは敵対というよりもっと内面的な意味でいうのだけれど

［別表］ 1960年前半の丸山眞男の学問と（一市民としての）政治参加[4]

1月19日　日米新安保理条約調印。
4月14日（木）【正統と異端研究会】園部不二夫（キリスト教神学者）「正統と異端」（資料番号674-1）
5月3日（祝）丸山眞男「現代における態度決定」講演（憲法問題研究会主催）→『世界』7月号
5月15日（日）安保批判武蔵野市民のつどい（井の頭公園にて）に丸山も参加。
5月18日（水）【正統と異端研究会】堀米庸三「中世の異端」（資料番号679-8-1）
5月19日（木）国会の会期50日延長を可決。
翌日未明　衆議院本会議にて新安保条約を承認。強行採決。
5月24日（火）丸山眞男「選択のとき」講演（安保問題研究会・安保批判の会共催）→『みすず』8月号
5月31日（火）丸山眞男「この事態の政治学的問題点」講演（東京大学全学教官研究集会）→『東京大学新聞』→『朝日ジャーナル』6.12号
6月10日（金）ハガチー事件
6月12日（日）丸山眞男「復初の説」（憲法問題研究会主催「民主政治を守る講演会」）→『世界』8月号
6月15日（水）新安保条約批准阻止の全学連が国会に突入。樺美智子さん死亡。
6月19日（日）新安保条約が自然成立。
6月25日（土）【正統と異端研究会】堀米庸三第2回「中世の異端　The Portable Medieval Reader　ワルド派、異端審問」（資料番号679-8-2）
7月11日（月）明星学園PTA「時局と教育についての座談会」に丸山も参加。
7月15日（金）岸内閣総辞職。
8月12日（金）【正統と異端研究会】石田雄「正統と異端」（資料番号548-1-1）
8月29日～9月2日　日本の近代化についての箱根会議

――対決していた当の相手が少くも僕の視野の中でフニャフニャになったために、こっちも何かガッカリして気がぬけちゃった。それが学問的ファイトの減退の大きな原因になっているような感じがします。（一九五八年九月九日、座談会「戦争と同時代」『同時代』第八号、黒の会）[5]

戦後一〇年以上が経過したとき、格闘すべき相手に手ごたえが感じられなくなっていた。右翼にしても左翼にしても、その正統なるものの実体が、日本の文脈において意外にも曖昧模糊としていたことに、丸山は気づかされた。そこから研究が始まった。格闘していた途中で、時代状況の変化から、相手が消えてしまった、というわけではないのである。

想い起こせば、一九五七年初出の論文[6]「日本の思想」も、堅固な実体の無さを主題の第一としていた。すなわち、「あらゆる時代の観念や思想に否応なく相互連関性を与え、すべての思想的立場がそれとの関係で――否定を通じてでも――自己を歴史的に位置づけるような中核あるいは座標軸に当る思想的伝統はわが国には形成されなかった」（新書版[7]、五頁）という命題を立て、座標軸をもたないまま安直に異文化摂取する帰結として、「ちがったカルチュアの精神的作品を理解するときに、まずそれを徹底的に自己と異るものと措定してこれに対面するという心構えの稀薄さ、その意味での物分りのよさから生まれる安易な接合の「伝統」が、かえって何ものをも伝統化しない」（同書、一七頁）と説いたのであった。それは言い換えれば、日本における思想の正統の不在や薄弱を意味する。その当時、日本で唯一の「正統」に見えた天皇制について、一九五七年の論文では次のように語った。

天皇を頂点とする集権的国家（まだ実質的集権力は十分でなかったとはいえ）が急速に整備されて行くと同時に、いやそれよりはるかにはやい速度と量とで、欧米の思想文化が開かれた門からどっと流れこんだために、国家生活の統一的秩序化と思想界における「無秩序」な疾風怒濤とが鮮かな対照をなし、しかも両者が文明開化の旗印のもとにしばしば対位法（コントラプンクト）の合唱をつづけた。この事態がどのような経過を辿って天皇制（イデオロギー的には国體）による正統化にまで統合されていったかの歴史的過程をのべることは本稿の範囲をこえる。（同書、一一頁）

ここで諦められた、「天皇制（イデオロギー的には国體）による正統化」の過程という大きな課題こそが、「正統と異端」研究の当初の目的の一つであったに違いない。本書第Ⅲ章でも詳しく論じられる着想である、「国體」の教義が無内容なこと――近代日本思想の雑然とした状況の中で、座標軸になりえない――にはすでに気づいていただろう。しかし、ここではまだO正統とL正統の仕分けの考え方には至っていない。方法を模索して、キリスト教史にまで深入りすることになる。

三　基本構図

『話文集』所載の最晩年の発言をみても、ドイツの学問が後年まで丸山の思想の基礎となっていたことは明らかである。「正統と異端」研究においても、参照基準は例えばマックス・ウェーバーであり（『別集』第五巻に収載予定の記録を参照）、またウェーバーの影響を受けたエルンスト・トレルチであった（本書、一〇頁、一二〇頁、一四五～一四七頁）[8]。教会型とゼクテ型の二項図式である。前者〈教会〉は、普遍主義とキリスト教文化の原理、精神的自由や流動性や適応能力、教義と祭儀の拘束、客観的、制度的、社会的な力（国家および社会を、精神的または事実上の支配）の点によって特徴づけられ、後者〈ゼクテ〉は、主観的・人格的真理と結束の原理、文化否定の急進主義、閉鎖性（信者集団の狭さ）、福音理解で妥協しない（よって普遍主義の放棄か、暴力か、終末論に至る）点で特徴づけられる。この図式を用いて、世界中の「正統と異端」の比較思想史にのりだそうとしたことが、本書冒頭の「正統と異端についてのノート」などからうかがわれる。ただ、トレルチ本人のキリスト教史理解では、教会型とゼクテ型の分類は中世に関する概念にとどまり、近代的世界において「キリスト教は、いまや、教会でもゼクテでもない。それは、神聖性を体現する施設を持たず、福音との急進的な結びつきも失っている」と明言していた[9]。その中世の二項図式を丸山のように応用するのは、いささか無理があったかもしれない。近代を対象とする以上は、日本特殊論の陥穽におちいって立ち往生する前に、いずれにしても「第三の型」を考案する必要があっただろう。

というのも、この研究の最終目標である近代日本思想の分析のために、教会もゼクテも有効でなかったからである。結局、丸山は近代天皇制や「国體」を取扱う際に、わざわざ面倒な分析の仕方をとった。例えばこういう言い方である。

> 国体論というイデオロギーが、本来普遍宗教でもないし普遍的教義でもないから、O正統の問題を適用する余地はあるとしても、きわめて限定的にならざるをえない。ややこしいいい方になるが、日本という特殊国家におけるL正統のイッシュをめぐるO正統の争い、ということになる。（本書、二八七頁）

「正統」概念の混同をLとOとに分解したのはよかったものの、最終的にその両者が混線した形でしか表現できない。まことにややこしい。分析する道具立てが不足していたと言わざるを得ない。

丸山は、「日本ではLがOのような顔をしている」（『七つの問答』二八頁）ともいうが、この点については丸山と石田雄との間の考え方のズレも興味深い。石田が「日本の場合には、L正統がO正統化すると」（本書、一八頁）、簡明に考えようとするのに対して、丸山はそれを否定し、「O正統のL正統への転化という問題はあるけど、これ一般論と

して、ぼくはL正統がO正統に転化することはないと思うんだ。」（同、一七頁）という。「疑似O正統」（同、一九頁）ともいう。[10] なるほど定義上、（a）信条・教義の体系であるO正統が、ある体制・組織の正統化（L）に都合よく利用されることは往々にしてあるだろうし、中には（b）O正統の教義それ自体の内部に特定の秩序像の正統化（L）を含むことがあるだろう（同、四頁、一二頁）。その逆にL正統の言説、イデオロギーの類が、そのままO正統の信条・教義として素直に信じられるとは、通常は考えにくい。だから丸山がその理論に固執するのも理解できるものの、しかし思想史の事実は、国民教育の次元や右翼思想家の一部について、石田のようなとらえ方を支持できるかもしれない。ともあれ今からみれば、OとLとの概念操作だけで分析しきれるとも思われない。研究を始めてから約三〇年が経っていたのに、二人の間で基本的な方法論の一致をみていなかった。[11]

本書第Ⅲ章で二人の議論は、「国體」の教義の確立がずっと後の『国體の本義』でなされた（正典の確立が異端に遅れる法則。本書、一〇五～一〇八頁。また八〇頁）のに対して、国家神道の儀礼の制定が早期に行われたことに関して、迷いながら進行する（本書、八五～九〇頁）。丸山は、国家神道について「はじめに儀礼ありき」という特殊な宗教として把握しようとする（八八頁）。ここで訂正あり。[12]

訂正　本書、八七頁三行目

（誤）石田　うーん、ただ、「さんさ」〔囃子詞〕と、こうやりますよね。これはたぶん、左からやらなくたって、右からやったっていいわけですけど（笑）。

←

（正）石田　うーん、ただ、「左右左（さうさ）」〔お祓いの時に両腕をあわせて左右に振るしぐさ〕と、こうやりますよね。これはたぶん、左からやらなくたって、右からやったっていいわけですけど（笑）。

このくだりは石田雄自身の旧制成蹊高等学校在学中の体験にもとづく。当時、神宮皇学館から来た土田誠一校長は、校内に神社を建てて、毎朝、神事を行った。その際、石田雄は、神主の衣装を着させられ、祝詞をよんでお祓いをさせられたという。[13] 貴重な実体験――しかも石田雄の実父、石田馨は内務省神社局長を勤めた――にもとづく議論で、興味深い。ただ、「正統と異端」研究としては、日本の神道だけでなく、他の思想も、教義面と実践面との乖離の観点から分析してみないと、すぐに日本の特殊さを評価するわけにはいかないだろう（例えばイギリス国教会のそれはどうか）。

四　さまざまな読まれ方

今後、「正統と異端」研究の足跡を追うことに、どのような意味があるだろうか。当面ありがちな読み方を、覚え書き風に記しておこう。

一つには、「異端」好みよりもO「正統」の確立を説くなんて、丸山眞男は歳をとって保守化したのでは？というものである。これについ

ては、とうの昔に書かれた、かの有名な一節こそが、丸山自身による応答となっている（丸山、四四歳）。

もし私の申しました趣旨が政治的な事柄から文化の問題に移行すると、にわかに「保守的」になったのを怪しむ方があるならば、私は誤解をおそれずに次のように答えるほかはありません。現代日本の知的世界に切実に不足し、もっとも要求されるのは、ラディカルな精神的貴族主義がラディカルな民主主義と内面的に結びつくことではないかと。

（一九五八年初出「「である」ことと「する」こと」、『日本の思想』新書改版、一九八頁〜）

それと正反対に、あくまで進歩派の丸山は戦後民主主義の「虚妄」を自分らのO「正統」にすえた？あるいは日本におけるO「正統」挫折の歴史を、戦後思想史に重ね合わせて分析しようとした？という読み方もありうる。これに関しては、たしかに丸山本人の自負と照れとが、本書第Ⅲ章で語られる。研究を始めた当初、「福沢諭吉のいう文明の精神というものを今日的に読みかえて、それをわれわれのオーソドクシーにする（笑）、ということが今日の課題である」と、当時の時点で結論づけたことを回顧する（四八頁〜）。ただし、あまり現実政治に即して思想史を理解されてしまうのは、丸山の本意ではあるまい。むしろうんざりしていた。だから「松沢〔弘陽〕君からこの間、怒られたんだ。先生が政治学を廃業したなんていうのはいけないと（笑）。」（本書、五七頁）。いったん思想史を時事から切り離して理解するとすれば、その思想史の今日的意義はあらためて問い直されることになる。この点について、『別集』第五巻収載の研究会の記録が参考になるだろう。

今も昔も日本社会における曖昧な「正統」派が「異端」を排斥する仕組を、この研究が解明してくれる、と期待する人もいる。その点についても、『別集』第五巻が待たれる。

五　儒学としての「正統」理解

最後に、中国思想における「正統」について、少しだけ補足したい。丸山自身が示唆したように（本書、二九頁、九七頁）、中国において「正統」が論じられたのは、特に宋代のことであった。欧陽修らによる「正統論」は史書編纂の必要から生じた。先行するどの王朝が「正統」であるかを認定することで、五行相生論により当代の王朝を正統化することができる（宋は火徳とされた）。具体的には、宋の直前の五代、その前の隋唐を挟んで南北朝、さらに魏呉蜀の三国時代をどう扱うかが争点となった。

土田健次郎による整理[14]にならえば、欧陽修の「正統論」は、①天下統一、②道義性、の二つを「正統」の条件としたが、②の認定がどうしても困難であった。そこで歴史上「正統」が断絶したことを容認せ

ざるを得なかった。これに対して、朱熹『資治通鑑綱目』「凡例」は、条件①だけで「正統」Lと認定し、②については別途「道統」論で取り扱うことにした。権力の所在と正義の実現との分離である。周知のとおり朱熹は、孟子以降の乱世に「道統」が失われたところ、宋代に周敦頤や二程子によって復活したとして、自分の学派をその後に位置づける（道統の伝）。本書（三頁、九頁など）ではこの「道統」をO正統の一種とみなす。しかし程朱学の図式が支配的なわけではなかった。例えば元末明初において、元朝をも正統王朝の一つに包含した楊維楨「正統辯」の場合、その「正統」の意味は「治統」Lと「道統」Oとを両方含みこむものであった。再びOがLにからめとられてしまう。本書、二九頁あたりの議論を理解するためには、このような思想史的背景を知っておく必要があるだろう。

注

（1）東京女子大学丸山眞男文庫草稿類デジタルアーカイブ http//maruyamabunko.twcu.ac.jp/archives/

（2）本書、四三七頁最終行。また『集』第八巻、四〇七～四〇八頁。

（3）本誌『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』前号（第一四号）所載。

（4）【正統と異端研究会】の開催日程は、東京女子大学丸山眞男文庫の川口雄一氏の調べによる。また『集』第八巻、解説（松沢弘陽）三九四頁～参照。

（5）『座談』二、二三四頁。なお『講義録』第四冊、解説（飯田泰三）三二二頁所引。

（6）『岩波講座 現代思想 第一一巻 現代日本の思想』（一九五七年）所収。

（7）岩波新書、二〇一四年改版。傍点は原文。以下同様。

（8）トレルチの大著の部分訳として、渕倫彦・トレルチ研究会訳「キリスト教会およびキリスト教諸集団の社会教説」（一）～（一七）、『東京都立大学法学会雑誌』二九巻二号～四四巻一号、一九八八～二〇〇三年がある。

（9）同訳文（一七）、同誌、四四巻一号、四一七頁。

（10）このズレについて本書「解説」、四四八頁。また石田雄『丸山眞男との対話』みすず書房、二〇〇五年、七六頁。

（11）なお石田『対話』では、一九八〇年代、「丸山の関心には微妙な変化が見られたように思われる」と指摘し、O正統よりも「L正統の比重の増大」、また「O正統よりも異端への関心の増大」があったと説く（同書、六五頁）が、はたしてそうだろうか。二人だけの間の議論であるから石田のほうの関心に議題が引っ張られることがあったであろうが、概念の定義に関する丸山のこだわりは堅いように思われる。

（12）石田雄氏本人の御教示による。

（13）石田雄『一身にして二生、一人にして両身』岩波書店、二〇〇六年、四六頁参照。

（14）土田健次郎「朱熹道統論の性格」、同『道学の形成』創文社、二〇〇二年所収（初出一九八八年）。同「朱子学の正統論・道統論と日本への展開」、吾妻重二・黄俊傑編『国際シンポジウム　東アジア世界と儒教』東方書店、二〇〇五年。同「「治統」覚書：正統論・道統論との関係から」、早稲田大学東洋哲学会『東洋の思想と宗教』二三号、二〇〇六年。